

デューラー研究 第23

デューラーの「絵画論」(9)

男性の足と幼児の比例の草稿の試訳

美術学科

下村 耕 史

Dürer's Drafts of his "On Painting" (9)
a translation by Koji SHIMOMURA

序

本稿は前8回の報告(第20, 22~28巻)と同じく,
Dürer Schriftlicher Nachlass, herausgegeben von
Hans Rupprich, zweiter Band, Berlin 1966 を底本
として試みられたデューラー未完の「絵画論」の
草稿の試訳である。凡例は前回に倣う。

(承前) Nr. 2 断片的記述のため省略。

Nr. 3 強健な八頭身の男性の左足の, 平面, 側面,
背面の構成のための詳細な説明。(ロンドン草稿, 1513
年頃, R.2.327~329頁)

1

次にいま描かれた強健な男性(拙稿「デューラーの
「絵画論」(4)Nr.22」参照)の足について, 前よりも詳
細に記そう。足の長さは(身長) $1/6$ で, 足の甲
の高さは $1/18$ であることを, 君は前に理解した。
後者は前者の $1/3$ である。足の長さを三分する。
足指は最前部に含まれる。足の甲の最厚部は第二
部分の終わりの方にある。踵は第三部分に含まれ
る。足はそこで上に伸びる。脛骨の内側の踝は外
側のそれより必ず前にくる。それで次に示す足の
平面図(図1を参照)を見れば, 足の上の脚がどの
ような断面図を示すのか, 足の上の脚の縦の長さ
が $1/20$, その横の長さが $1/24$ であることが分かる。
こうして足裏, 足指, 足の踝の線をどのようにし

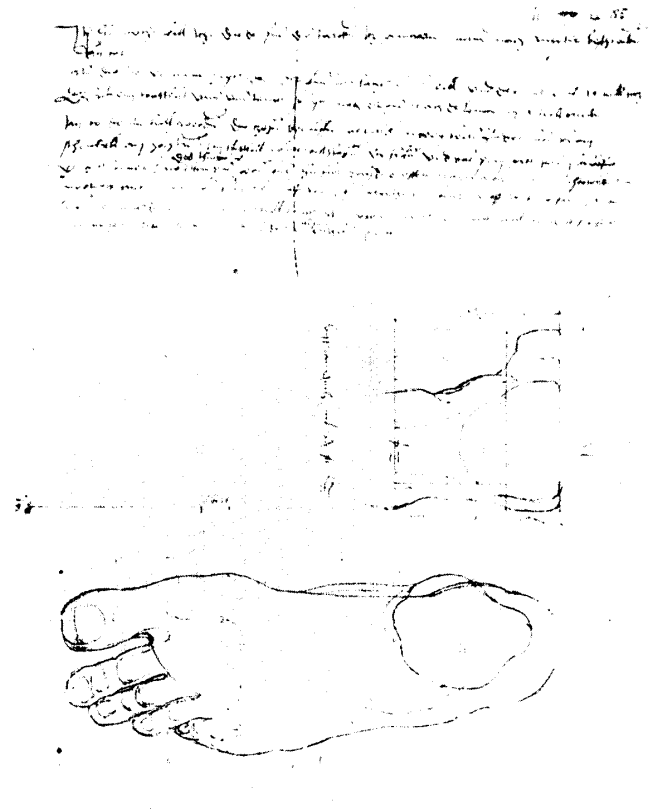


図1 ロンドン草稿 5230, fol.185^a

て描くのが分かる。

次に足の背面図について記す。

2

次にいま描かれた強健な男性(拙稿「デューラーの
絵画論(4)Nr.22」参照)の足について, 前よりも少し
詳細に記そう。

足の長さは〔身長〕の $1/6$ であることは理解された。それで長さ $1/6$ 、幅 $1/15$ の長方形を作る。親指のある隅を a 、他の3つの隅を bcd とする。

この足の長さを2線 ef と gh で3等分する。足指は前の $1/3$ に含まれる。中央部分で足は裸出し、足の甲の高さはここにくる。踵は後ろの $1/3$ に描かれる。脚はここで上に伸びる。脛骨の内側の踝は外側のそれより前にくる。脚は踵の真上にのらずに内側によるので、内側の踝は突出する。足は体重を支えるため、外側に少し張り出る。

足の後ろの $1/3$ の幅を6点で7等分する。最初の点から足の内側に向けて平行線 jk を引く。その線は踵と内側の足裏に接する。親指はその線の方に傾く。親指の膨らみは垂線 e で方形の上の水平線に接する。後ろの内側の踝も同様である〔方形の上の線に接する。〕。

次に示す平面図には、その上の脚がどのような形をしているのかがみられる。脚の前の幅は $1/24$ である。

脚の横の厚さは $1/20$ である。

その際足の横の踝が描かれているのがみられる。次に足の中央部では、足裏が輪郭線に囲まれる有様、足裏の輪郭線を足の内側の甲が越え出る有様、更に小指の膨らみが垂線 f 上で方形の水平線を少し越え出る有様がみられる。

水平線 jk と2垂線 ef および gh との交点を前後それぞれ l と m とする。

粗野な人間の足のように、足指をまっすぐのびているように描くのではなく、後述するように描くことである。

線 ek を引く。親指の線はその外側にはみ出して引かれる。線 ab を点 n で2等分して線 gn を引けば、親指は kn 間に含まれ、小指の方に少し傾く。

線 md を引く。第三指の外側部分〔小指側〕はその線の外に出る。 nd 間を2点で3等分する。 d よりの点を o とする。線 go を引けば、第三指は od 間に含まれる。第二指の〔小指側〕の側面の殆どが線 go に沿う。

これ〔 df 間とみられる〕を2点 pq で3等分すれ

ば、 dp 間に第四指が含まれる。小指は隅 p 〔範囲の規定がやや曖昧〕の半分に含まれる。点 q から垂線を引けば、それは小指の長さを示す。

線 gn と線 ef の交点を r とする。

コンパスをとり、一方の脚を点 r 、他方の脚を点 n において、円弧を描く。円弧は第二指の前に接する。

コンパスの一方の脚を点 r において、点 k から円弧を描く。その線は第三指に接する。

コンパスの一方の脚を点 l 〔テキストでは r とあるが、文脈から l と考えられる〕において、点 k から円弧を描く。その線は第四指の長さを示す。

eg 間を2点 st で3等分する。コンパスをとり、両脚間の長さを ao として、一方の脚を点 s において、指の方に向かって円弧を描き、3直線 ng 、 og 、 dg とその線を交差させる。その円弧が足の付け根の位置を決める。ただ小指の付け根はそれよりもかなり低い位置にあり、足のかなり下方で内向きに位置する。

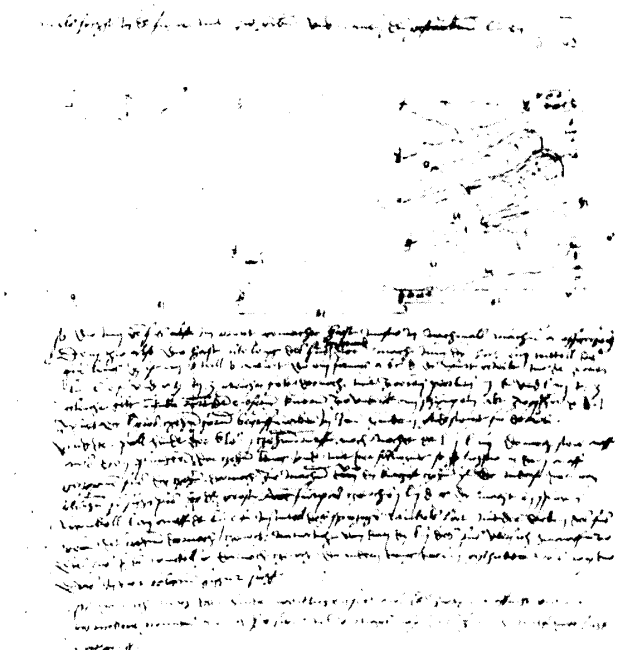


図2 ロンドン草稿 5230, fol.186^b

親指には二つの節があり、後ろの節の方が前のそれよりその1/3ほど長い。他の4指には各々三つの節があり、後ろの節はほぼ前の二つの節を合わせた長さである。前の節は中央の節より短い。親指は他のどの指よりかなり大きい。第二指は第三指より大きい。同様に第三指は第四指より大きい。第五指が最小であるが、その〔付け根の〕膨らみは高く逞しい。

図に引かれた線を改めて長くしたり短くしたりすることを考えながら、方形内に足の形態の線を描き込む。

足の平面図を描いたのち、その立面図を描く。次のようにする。平面図における足の全ての部分の長さはすでに分かっている。そこで足の高さを足の長さの1/3—それは〔身長〕の1/18になる—にして、方形abcdを作る。方形を2線efとghで3等分する。方形を2本の水平線jkとlmで3等分する。jkは脛骨の最下の外側の踝に接する。親指の前はdl間に含まれるが、後ろの節の処でその上に出る。

小指の後ろの膨らみは線lmにはほぼ触れる。

〔足指が〕分岐して足指の長さ〔の先端を示す〕各点から上に線を引けば、足の立面図に指〔の高さ〕の線を引くことができる。小指が最も低い。指は親指にいくほど高くなる。

線dgを引く。線ef上に鋭角lm〔のなす辺〕が生じる。鋭角の〔なすその辺の〕中心を足指の側の足の高さとする。その点から自然な形で足の線を隅gまで斜め上方に引く。その後次図〔図3〕にみるように、他の部分をそこに巧みに描く。

足の立面図と平面図の二図からフェアトラーク〔vertrag〕により足の背面図を描く。〔デューラーはこの図法を最初 Vertrag (Fertrag), 後に Übertrag となづける。この呼び方の変化が起草時期を決める手がかりになる。…ルツブリッヒの註による。またフェアトラークについては拙稿「デューラーの絵画論」(4) 49頁の筆者による割注を参照]

線efでの足の断面図は次のようになる。

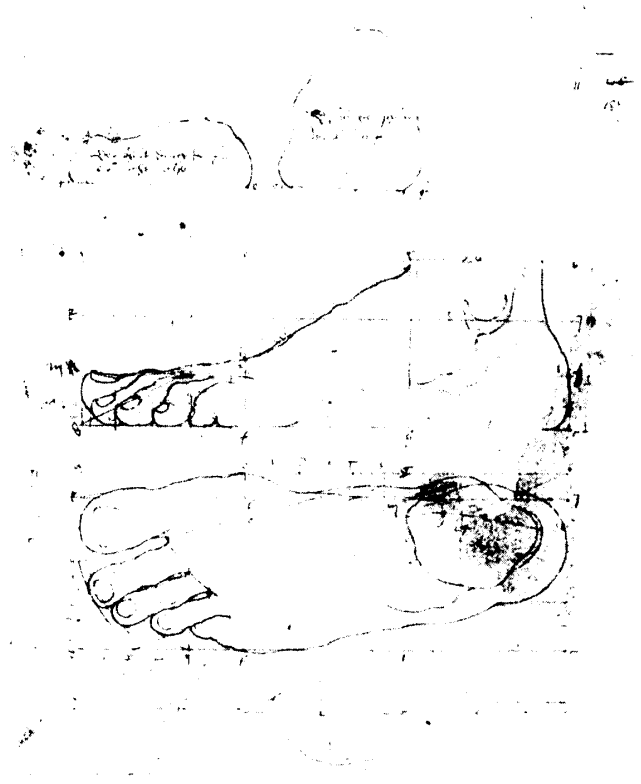


図3 ロンドン草稿 5230, fol.187^a

これは線ghでの足の断面図である。

Nr. 4 男性abの左足の、立面図と平面図の構成のための詳細な説明。(1~3 ロンドン草稿, 4 ドレスデンのスケッチ帖から、全て1513年かその直後, R.2.330~335頁)

1

必要な線を全て上方に引いた後、それらの全ての線に水平線を通す。上の水平線をa、下のそれをbとする。その2線間の高さを〔身長〕の1/20とする。水平線aは脚を足の甲から区分し、線bは足裏になる。こうして足の立面図のための長方形が、足の平面図のための別の長方形の上に描かれ、その全ての長さは下の長方形同様に区切られる。

次に足の立面図の諸部分の高さを区切る。

まずこの新しい長方形のab間を2本の水平線で3等分して、上の水平線をe、下のそれをfとする。各部分特有の形と大きさは、長さを加減して作られる。それで……

2

手をいま実際に完成させたので、次に足について前よりも詳細に記し、描くことにする。

最初に描かれた男性について前同様、男性の身長 a b の $1/6$ を足の長さ、同じ身長 a b の $1/16$ を足の幅とし、この長さとお幅から長方形を作る。それを水平におき、上の水平線を a 、下のそれを b とする。2本の垂線のうち、前のそれを c 、後ろを d とする。その際足指のある方を前と呼ぶ。足の平面図は、長方形の前と後ろの両辺の幾つかの箇所で、長方形に接する。足の長さを2本の平行な垂線 e f で3等分する。

足指は前の $1/3$ の c e 間に含まれる。中央部分で足は露出し、足の甲の高さはここにくる。踵は後ろの $1/3$ に描かれる。脚はここで上に伸びる。

脛骨の内側の踝は、外側の踝よりも、足指の方にある線 f に近い。内側の踝は水平線 a に接する。それで脛骨は〔水平〕線 a の内側よりあり、内側の踝は内側の足裏より突き出て、足は力強く体重を支えるために、少し外に張り出る。

〔水平線〕 a b 間の最後部の垂線 d を6点 g h j k l m で7等分すれば、点 g は水平線 a に最も近い。線 g を引いて足の全長を通す。その線と垂線 f との交点を n 、垂線 e との交点を o 、最前部の垂線 c との交点を p とする。線 m を垂線 f まで引き、その交点を q とする。線 m は足裏の外側の縁に接する。線 f を〔垂線〕 d f 間の最初の $1/4$ まで引く。それは踵〔の発端〕に接する。2本の垂線〔 f d 〕間の水平線 a を2点で区切り、それに数字を付して、 f 1 と d 2 とする〔意味がやや曖昧で、意識した〕。点 j 〔前後の文脈から前記 f 1 を指すと解される〕から垂線を下ろす。この垂線は脚の踝を通る。垂線 j 上の脚の幅は $1/24$ である。水平線 a は内側の踝に接する。

最初に描かれた方形を2本の垂線 e f で3等分する。足指は前の $1/3$ に含まれる。中央部分で足は露出し、足の甲も全てそこに含まれる。踵は後ろの $1/3$ に描かれ、足のその部分で脚は上に伸びる。

後ろの垂線 d を2本の水平線 a b 間で、水平線 a

から g h j k l m の6点で7等分し、点 g から垂線 c まで〔水平線 a に〕平行に水平線を引く。この線 g と垂線 f の交点を n 、垂線 c との交点を p とする。

点 m から〔水平線 b に〕平行な水平線を引き、垂線 f との交点を o とする。2本の水平線 a b 間で、垂線 c を点 q で2等分する。垂線 c 上の q b 間の高さを2点で区切り、上を r 、下を s とする。2本の垂線 c e 間で水平線 b を2点 t v で3等分する。

2本の垂線 e f 間で水平線 a を2点 x y で3等分する。垂線 f d 間で水平線 a を2点 z f' で3等分する〔 f' はテキストの f に似た文字の代用〕。 f' の方が垂線 d に近い。点 z から〔垂線 d に〕平行な垂線を下ろす。 f' d 間を2点で3等分する。 d に近い方の後ろの点を t^2 とする。

次に斜線 p e 、 q y 、 s f を引く。垂線 c ・水平線 b の交点と点 n を斜線で結ぶ〔以下これを斜線 b n と略称する〕。点 t と f' を斜線で結ぶ。コンパスをとり、一方の脚を点 q' 〔テキストの q に似た文字の代用で、図4から推量すれば、斜線 q y と垂線 e の交点を指す〕、他方の脚を点 p におく。〔点 q' を基点として〕点 p から斜線 q y 、斜線 s f 、更に斜線 b n まで、同じ円弧を描く。

もう一度コンパスの一方の脚を点 q' におく。コンパスを開いて点 q 〔に他方の脚をおいてそこ〕から下の斜線 s f まで円弧を描く。再びコンパスの一方の脚を点 q' におき、他方の脚を点 v において、そこから斜線 b n まで円弧を描く。更に水平線 a 上の、 f' c_2 間の点〔 c_2 は初出であるが、図4から推量すれば、 f' c_2 間の点とは前記の f' d 間の2点のうち、 f' に近い方の点を指す〕から垂線を下ろす。点 1 から〔水平線 b に〕平行な水平線を引けば、その線は上記垂線と交差する。その交点を β とする〔 β はテキストのクローバの葉の形に似た特殊な記号の代用〕。再びコンパスをとり、 p b 間の高さを半径として、一方の脚を点 x において、他方の脚で円弧を2本の斜線 q y と t f' 間に描く。その円弧と斜線 q y 、 s f 、 b n のそれぞれの交点から、垂線を下ろす。このようにして足指は区切られる。その際斜線上にくる小指と薬指の間の溝の深さは、垂線 v e 間の〔 v から〕 $2/3$

まではいかない。

これで真っ直ぐな線が引かれたので、そこにどのように足の形を描き込むかを、おおまかに示そう。次のようにする。

最初に後ろの踵の上の脚の断面図と足の甲の平面図を描く。脚の後ろの付け根は、水平線 h 上で垂線 ω に接する〔 ω はテキストの文字の近似的表示で、前記の $f'd$ 間を 3 等分する 2 点のうち、 f' に近い方の点を指す〕。水平線 h 上の脚の長さは、足のそれの $1/3$ である。両踝の上、垂線 z 上での脚の幅は $1/24$ である。内側の踝の上は水平線 a に接する。内側の踝は外側のそれより足指に近い。また内側の踝は外側のそれより平らで幅広い。外側の踝の方が内側のそれより尖っていて、それと後ろの腱の間のくぼみは、内側の踝のそれより低い位置にある。脛骨は踵の中央で上に伸びるのでなく、内側による。踵は幾分か外に張り出る。足の外側では踵の張り出しの程度は踝のそれ以上であり、足の内側では踵と踝のそれは同程度である。そのほうが体の重みに一層強く耐えられるのである。それで上記のことを理解した上で、〔足に〕包み込まれる脚の線を描くことである。その後踵の後ろが点 j に接するように、踵の線を引く。点 j から $z f'$ 間の中央の水平線 a まで、踵の線を円弧状に描く。踵の線を 2 点 $f n$ 間の下 $1/3$ のところの垂線 f まで円弧状に描く。踵の線を点 j から交点 β まで、更にその線を点 β から点 o まで曲線状に描く。足裏の線を点 o から水平線 b まで描く。小指の下部の膨らみは、垂線 $e f$ 間の前の $1/3$ で水平線 b に接する。親指の下部の膨らみは、垂線 e 上で水平線 a に接する。

次に足裏の線を親指の下部の膨らみから点 n の上の踵まで描く。その線は $e f$ 間の後ろ $1/3$ で線 $p g$ に接する。足は $f z$ 間で特に高くなる。外側の踝の前に線を引く。足の甲の線を脚から描く。足の内側にくぼみがあるので、足の甲の外郭線は、足裏のそれより外にでる。

次に足指の線を垂線 $c e$ 間の前 $1/3$ に描く。足指を、粗野な人々がそうであるように、真っ直ぐに前に向けるのでなく、前に引かれた斜線のなか

に描く。最初に親指を描く。足の甲からの親指の出方は小さく、親指は小指の方に傾く。指先が点 p から引かれた円弧に接するように、親指を 2 本の斜線 $p e$ と $q y$ の間に描く。親指は他の指よりはるかに大きいので、それが描かれる 2 本の斜線間全体にわたるように、それを描く。親指には二つの節がある。後ろの節は前のそれよりその $1/3$ ほど長い。親指の長さは足のそれの $1/4$ である。親指の爪の長さは、爪のある節の $1/2$ である。

次に他の四指を描く。四指のそれぞれの長さは、円弧による各指の区切られ方によって決まる。垂線 v に接し、他の指の方に傾くように、小指を描く。小指は短く、足の後ろの方に位置する。小指の後ろの膨らみは大きい。

しるしをつけるための円弧を描く。コンパスをとり、一方の脚を点 f 、他方の脚を水平線 $p g$ 上の親指の長さを示す点 $[p]$ におく。〔点 f を基点として、点 p から〕 4 本の斜線 $q y$, $s f$, $b n$, $t f'$ を通って、下方に円弧を描く。この円弧は斜線間での中央の三指の長さを示す。

これらの斜線は、中央の三指が小指の方に傾いていることを示す。各指の後ろの節の方が、前の二つの節より短い。指先の節は中央の節よりその $1/3$ ほど短い。第二指は親指よりはるかに小さい。第三指以下は益々小さくなる。第二指は斜線 $s f$ にそのような状態にある。親指と第二指の間が空いているからである。このようにして足の平面図が描かれる。

足の平面図が描かれたので、次にその上に足の立面図を描く。次のようにする。足の平面図の全ての垂線をフェアトラーク〔fertrag〕によって上の立面図に移すことによって、足と足指の長さ、各指の長さ、指の付け根間の深さ、踝が脚につく位置、脚が踵にのる位置が示される。要するに平行線を上に引くフェアトラーク〔転移図法〕によって、足の立面図の諸部分の全ての長さが示される。2 本の垂線 $c d$ 間に足の長さとその内部が描かれたので、次に足の高さとその諸部分の高さを描く。次のようにする。

フェアトラークによって上に引かれた全ての垂

線に、2本の平行な水平線を通す。上をa、下をbとする。垂線cd間と水平線ab間に長方形が作られる。長方形の長さは足の平面図のそれと同じである。ab間の高さは足の長さの1/3である。そのなかに足の諸部分の高さを区切る。

水平線ab間に2本の水平線efを引いて、その間を3等分する。そのなかに足の線を描く。水平線eは脛骨の外側の踝の下と踵の上に接する。踵の上の小さな膨らみはae間の半ばまでくる。腱がそれに続く。水平線ef間と垂線zy間で、脛骨の踝の下の足の甲の高まりの線を入れる。足の甲の高まりは水平線eをこえる。足裏は水平線b上にある。足の甲は垂線上で水平線aに接し、垂線ef間の半ばで水平線eまで下り、そこからさらに2水平線ef間の下1/4のところで垂線eまで下りる。親指の付け根の節の線を、水平線fの上で垂線eの前に描き、その線を垂線ce間の半ばで水平線fまで下げる。

親指の後ろの節は水平線fに接する。親指の爪のある指先の節は、2水平線fb間の上1/5のところで〔垂線cに〕接する。

小指の最後部の節の高さは親指の指先のそれと同じで、体の重さを支えるため、小指の後ろは著しく膨らむ。小指の指先は小さい。次に中央の3指を描く。親指の隣の第2指の最後部の節の高さは、中央の節のそれと同じである。第3指は〔第2指〕より低い。第4指はもっと低い。一方から減じて他方を作るといのように、内から外に向かうにつれて、指を小さくする。指の最後部の節は高くなり、指先の節はどれも低くなる。爪、節など全ての部分の長さを、足の平面図からフェアトラークによって立面図に移す。その後必要な全ての部分の線を描く。踵からみた足の後部を次のように描く。その方形の幅は足の平面図の幅と同じにして、方形の高さは足裏から足の甲までの高さにする。上の水平線をa、下の水平線をbとする。また足の2本の垂辺の外側の方をc、内側の方をdとする。足の平面図の踵の後ろの6点g h j k l mをとり、いま描かれた方形の水平線bを、それらの点で7等分する。点g-mから垂線を上に

引く。それらの垂線を通して2本の水平線efを引く。次図〔図4〕にみるように、いま描かれた方形内の〔水平線と垂線の〕交点から、各部分の位置、足の後部の有様が、フェアトラークによって示される。

足の正面図もフェアトラークによって描かれる。足の二つの断面図、即ち垂線fと垂線e上での断

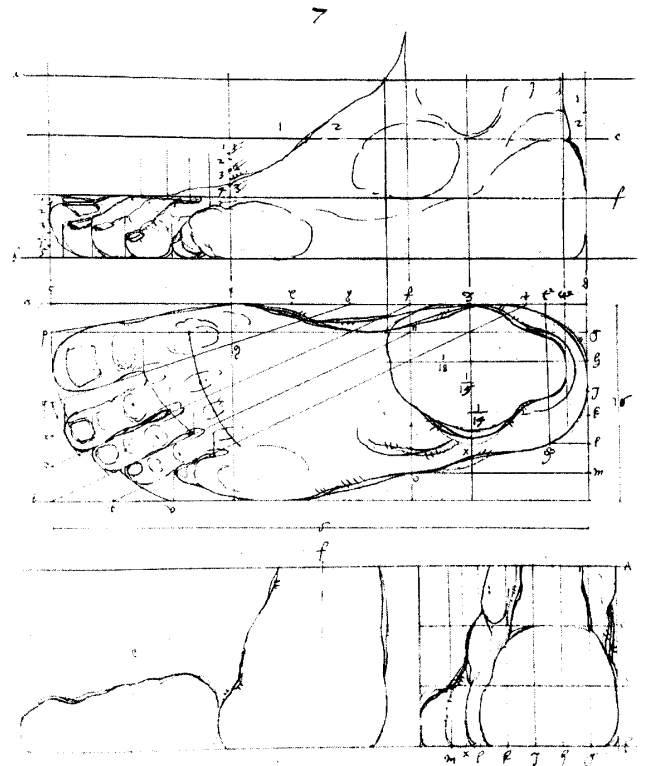


図4 ドレスデンのスケッチ帖 fol.97^a Strauss 125
面図が次にみられる〔図4〕。

4 (4は図4のみ)

Nr. 5 八頭身の男性 b b c c の右足の構成の詳細な説明と平面図。(ニュルンベルク市立図書館, 1513年後, R.2.336~339頁)

1

…2本の垂線ce間の水平線b〔前にあったはずの、両面に文字の記入された一紙葉が欠如している…ルップリッヒの註。またこの項全体に亘って図4を参照のこと〕。この点vから〔垂線cに〕平行な垂線を上に引く。この線は小指の前に接する。

次に垂線 e f 間で水平線 a を 2 点 x y で 3 等分する。2 垂線 f d 間で水平線 a を 2 点 z f' で 3 等分する。[f' については Nr. 4 の割注を参照]。

私の挙げる文字は〔対象となる部分の〕前に記されねばならない。つまり誤って使用されたり誤解されないように、点は足指の前に記されねばならない。

点 z から〔垂線 d に〕平行な垂線を引く。内側の蹠はこの線上で水平線 a に接し、踵も垂線 f' 上で水平線 a に接する。

この垂線〔z〕上の、外側の蹠の上の脚の幅は〔身長〕の $1/28$ である。脚の下の蹠は線 z 上で脚の線の上にでるので、蹠を含む足の幅は $1/23$ である。

次に点 1 から〔水平線 b に〕平行な水平線を引く。2 線 z 1 の交点に、菩提樹の葉の形 \bigcirc 〔テキストの葉の形の代用〕を記す。この交点は足裏の外郭線に接する。その線は〔この点を経て〕後ろの踵の方に伸びる。

点 f' と垂線 d 間の水平線 a を 2 点で 3 等分し、前の点を t^2 、後ろの点を ω とする。点 f' から垂線を下に引く。水平線 k 1 間を 2 点 1 と 2 で 3 等分する。点 2 から〔水平線 b に〕平行な水平線を引く。その線と垂線 f' との交点を β とする〔 β はクローバの葉の形を代用〕。この線から踵は後ろに円弧状に張り出す。

垂線 f' から垂線 d 上の点 h まで、踵の線を円弧状に描く。

点 f' と垂線 d 間の水平線 a を 2 点で 3 等分し、前の点を t^2 、後ろの点を ω とする〔前の繰り返しであるがテキストの通り〕。点 ω から水平線 h まで垂線を引く。この線端は足の腱に接する。足の腱の踵への張り出しは、 ω と d との間の前 $1/3$ までである。

次に斜線を引く。

最初に線 p e を引く。次に第 2 の線 q y を引く。この 2 線間に親指が描かれるが、親指の付け根の節は線 p e を僅かにこえる。この線 q y と垂線 e との交点を q' とする。

多くの粗野な農民がしているような真っ直ぐに伸びる親指でないことを知ることである。

それで手から 4 本の長い指がのびる状態に合わせて、斜線が引かれる。それらは体の重さを支えるため、小指の方に傾く。

次に斜線 r y を引く。親指と隣の指の間はかなりあけられる。その斜線が示すように、中央の 3 指は〔指の付け根からみて〕最初の親指より長く引かれる。

次に s から f に斜線を引けば、親指のよこの 2 線 r y と s f の間に第 2 指が含まれ、描かれる。

次に…を引く〔ほぼ 1 紙葉分の草稿が欠如〕。

2

手を仕上げたので、足について前よりも詳細に記し、描くことにする。足指の形状とはどのようなものであるか、ある指と他の指はどのような関係にあるのか、各指はどのような特有の形をしているのか、踵はどのような比例のもとに描かれるべきなのか等について、描かれるべき足には特に大きな kunst が潜んでいる。だれでもこのことについて一層詳細に探究することができるが、ここでは少々そのことについて示して、一考に供しよう。

それですぐ前に記した線 b b c c 上の男性像の足について、その長さが男性の身長 $1/12 + 1/13$ 、幅が $1/17$ であるとしよう。

この長さからなる長方形を作り、水平状において、上の水平線を a、下の水平線を b とする。2 垂辺のうち、指の方を c、踵の方を d とする。親指が前の垂線 c に、踵が後ろの垂線 d に接するように、足をこの方形内に描かなければならない。足の内側で親指の後ろの膨らみは水平線 a に接する。踵の中央で〔垂線 d に〕接するわけではない。足の外側で小指の後ろの膨らみは下の水平線 b に接する。

最初に足の平面図を描く。

この方形を次のように区切る。

2 垂線 c d 間を、前が e 後ろが f の 2 本の平行な垂線で 3 等分する。足指は最前部に描かれる。足の露出部分と足の甲全体は中央部に含まれる。踵は第 3 の最後部に描かれ、この部分で足は上の

脚へと伸びる。

次に2水平線 a b 間で垂線 d を6点 g h j k l m で7等分して、点 g から〔水平線 a に〕平行な水平線を垂線 c まで引き、線 c との交点を p とする。この平行な水平線 g p と垂線 f との交点を n とする。

点 m から〔水平線 b に〕平行な水平線を引き、垂線 f との交点を o とする。

次に点 h から〔水平線 a に〕平行な水平線を、身長 $\frac{1}{17}$ の長さほど引く。この線は垂線 f を通る。

次に2水平線 a b 間で垂線 c を点 q で2等分する。

次に垂線 c 上の q b 間を、上が r 下が s の2点で3等分する。

次に2垂線 c e 間で水平線 b を2点 t v で3等分する。この点 v から上に垂線を引く。この線は小指の前に接する。

次に2垂線 e f 間で水平線 a を2点 x y で3等分する。2垂線 f d 間で水平線 a を2点 z f' で3等分する。

私の挙げるとの文字も〔対象となる部分の〕前に記さなければならない。それはその前の指を指し、点が誤用されたり、誤解されたりしてはならない。

次に点 z から〔垂線 d に〕平行な垂線を引く。

次に点 f' と垂線 d 間で水平線 a を、前が t^2 後ろが ω の2点で3等分する。

次に k l 間を2点 1 と 2 で3等分する。点 f' から垂線を下に引き、点 2 から別の水平線を引く。2線 f' と z との交点を β 〔テキストにおけるクローバの葉の形の代用〕とする。踵の線はこの交点から点 h まで円弧状に描かれ、更にそこから点 f' まで描かれる。

次に点 f' と垂線 d 間で水平線 a を、前が t^2 後ろが ω の2点で3等分する〔前の繰り返しであるがテキストの通り〕。

次に点 l から〔水平線 b に〕平行な水平線を、また点 f' から別の垂線を引いて、その直角の交点を β とする〔 β は同じく代用であるが、ここでは前記の β と異なる位置を指す〕。

次に斜線を次のように引く。

最初に p e を引く。

次に別の斜線 q y を引く。

この2線の間親指の外側と内側の線が引かれる。その線は指の付け根の節で線 p e を僅かにこえる。斜線 q y と垂線 e との交点を q'〔テキストにおける q に似た文字の代用〕とする。

次に別の斜線 s f を引く。

親指とすぐ隣の指との間をあける。

水平線 b と垂線 c の交点と点 n を結ぶ斜線を引く〔以下斜線 b n とよぶ〕。

次に点 t と f' を線で結ぶ。

点 v から垂線を上の斜線 t f' まで引く。

次にコンパスをとり、一方の脚を点 q' に他方の脚を点 p におく。〔点 q' を基点として〕点 p から下の、斜線 s f と b n の間まで円弧を描く。

次にコンパスの一方の脚を点 q' におき、他方の脚を〔点 p より〕ひろげて点 q におき、点 q から斜線 s f まで円弧を描く。

次にコンパスの一方の脚を再び点 q' に他方の脚を点 v におく。〔点 q' を基点として〕点 v から斜線 b n まで円弧を描く。

次にコンパスで p b 間の高さをとり、一方の脚を点 x〔テキストでは f' とあるが、図4よりみて明らかに x が正しい〕におき、他方の脚で斜線 q y, s f, b n まで円弧を描く。この円弧と各斜線の交点から、垂線を上に引く。

C. 4. 幼児の比例

Nr. 1 幼児の身体の側面像。(ドレスデンのスケッチ帖から, 1508年頃, R.2.341~342 頁)

乳頭。



図 5 ドレスデンのスケッチ帖 fol.165^b Strauss 22

Nr. 2 幼児の比例。(ロンドン草稿, 1508年後まもなく, R.2.342 頁)

幼 児

幼児の比例は 4 頭身である。[ガウリクスによれば 4 面長…ルップリッヒの註] 即ちのどのくぼみまでの頭部の長さは [身長] 1/4 である。頸部がみえないからである。

のどのくぼみから臍までの長さも 1/4 である。

臍から陰部までは 1/5 である。

のどのくぼみから脇腹までは 1/5 である。

脇腹から腰までは 1/10 である。

膝は腰と足裏の中央にある。

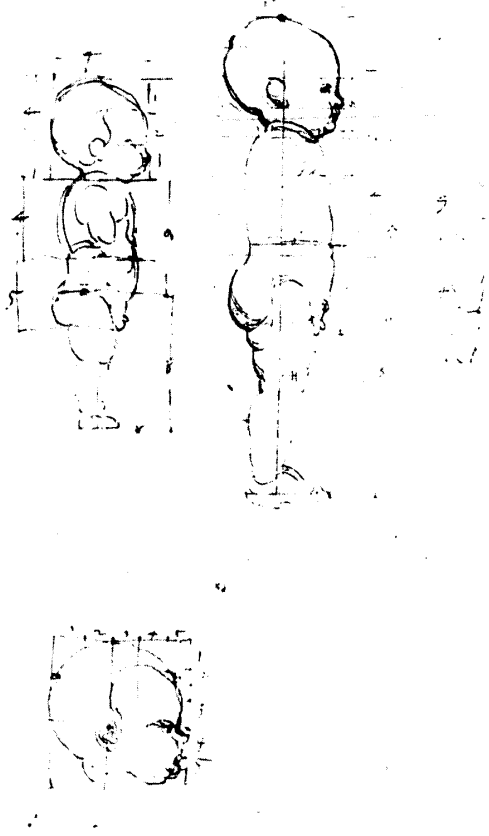


図 6 ロンドン草稿 5228, fol.187^a

Nr. 3 幼児の側面・正面・背面像の比例。(1 ロンドン草稿, 2 ニュルンベルク, ゲルマン民族博物館, 1513年前, R.2.342~343 頁)

1

幼児について

次に幼児について記そう。前の形像と同様に, 3本の垂線を用いる。

最初に幼児の肢体部分の長さを水平線で区切り, ユーバートラク (vbertrag) によって必要なだけ別の2本の垂線に移す。始めることにして次のように測る。

2

次に幼児について記し, 図示しよう。前記の形像と同じ順序でそれをする。最初に幼児の側面,

次に正面，更に背面図を示す。

この幼児の全ての部分の長さを次のように測る。

最初に幼児の身長に当たる長さの上に水平線 a，下に別の水平線 z を引く。

次にこの身長に当たる長さの線の上から1/4のところ、水平線 b を通す。この高さで幼児の側面像の〔頭部の〕ための正方形を作る。この正方形に頭部を描き入れる。鼻の出ている前の垂辺を a，後ろの垂辺を b とする。幼児の〔頭部の〕側面ないし正面像の各方形の中央が、〔幼児の正中線を示す〕垂線上にくるようにする。

頭部の側面像を次のように区切る。最初に顔の諸部分の全ての長さ，高さ，低さを水平線で区切る。

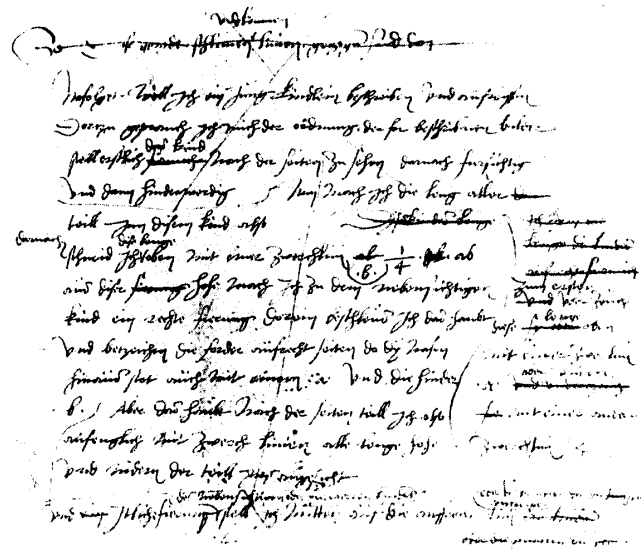


図7 ニュルンベルク，ゲルマン民族博物館 fol.7^a

Nr. 4 二人の幼児の身体の正面像，腕，側面像の構成。(ロンドン草稿，1513年前，R.2.343~344頁)

頭頂部。額。眉毛。鼻。口。顎。のどのくぼみ。肩の高さ。腋。乳頭。胸下。脇腹。臍。腰の下端。腹の下端。陰部。臀部の内側の下端。膝。足の甲。足裏。

Nr. 5 幼児の比例，頭部の三つの素描，頭部と身体の側面の素描，正面像，幼児の身長はある女性の1/3。(ロンドン草稿，1513年，R.2.344~347頁)

1

幼児について記し，図示しよう。前記の形像同様に，幼児の身長に当たる長さの垂線を3本平行に引く。垂線の上から1/4のところ、水平線を引き，3垂線を通す。3垂線の上1/4のところ、三つの方形を作り，その中央が垂線上にくるようにする。最初の側面像のための，幼児の頭部の方形の幅は，高さ同様1/4である。頭部の正面と背面のための二つの方形は，高さは最初の方角と同じであるが，幅はそれぞれ2/9である。幼児の頭部は比例的に成人の頭部より大きい。

方形が作られたので，それらの三つの方形の中央が垂線の上にくるようにする。最初に頭部の側面のための方形を，顔の全ての部分の奥行きを示す垂線で区切る。前の垂辺を a，後ろの垂辺を b とする。

方形の中央を通る垂線を c とする。

それと平行な別の垂線を次のように引く。

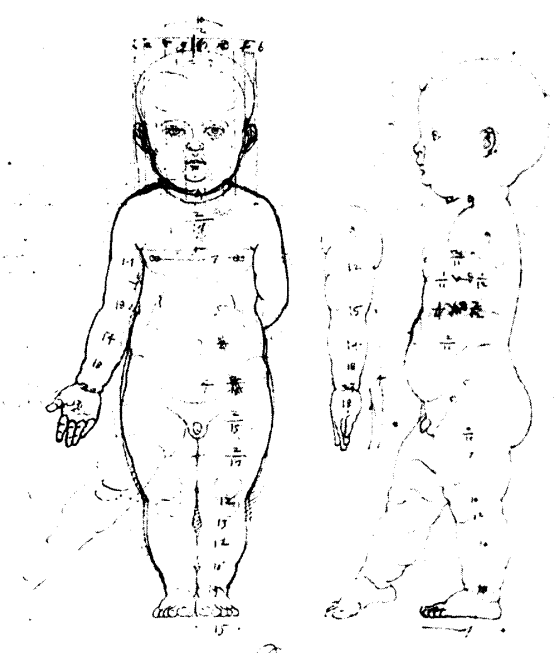


図8 ロンドン草稿 5228, fol.186^a

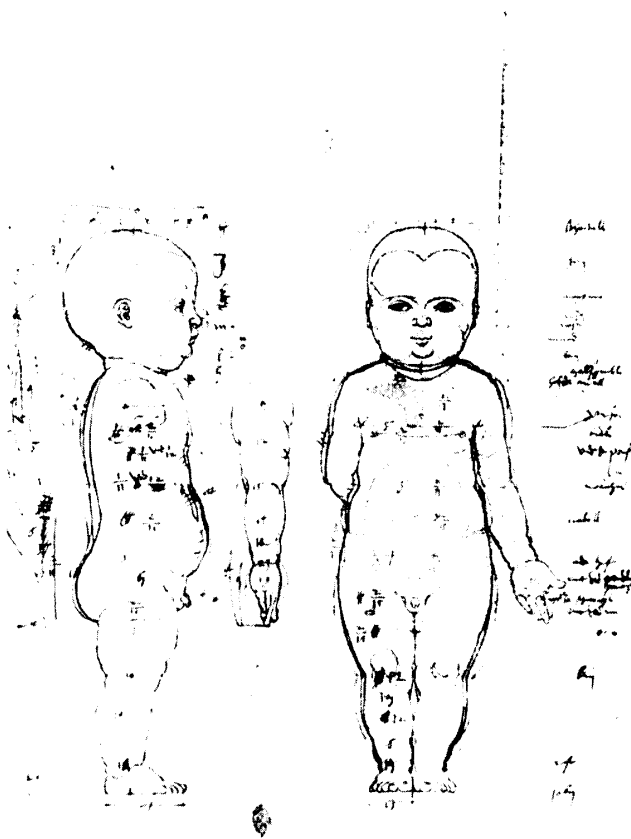


図9 ロンドン草稿 5228, fol.186^b

最初に垂辺 a から [身長の] 1/16 後ろに垂線 d を引く。この垂線 d は眉毛の後ろと頸部の前に接する。

垂線 a b 間を別の垂線 e f g h で 5 等分する。最前線 e は額の旋毛、鼻の上、額の下のかぼみ、上唇の前に接する。垂線 f は眉毛の前、鼻翼の後ろ、頬の前、口の隅、下唇と顎の間のくぼみに接する。

垂線 g は臉のかぼみの上、瞳の前、顎下のくぼみに接する。

垂線 h は眼の隅の後ろに接する。

次に垂線 a e 間を垂線 j で 2 等分する。この線は額の前、鼻先に接する。

次に垂線 e f 間を上唇の下のところまで垂線で 2 等分する。この線は下唇の前、顎の前に接する。

次に垂辺 a の 3/20 後ろに垂線 k を引く。耳全体は垂線 c k 間に含まれる。耳朶は垂線 c より半分含まれる。

垂線 a から [1/4 の] 1/5 後ろに垂線 l を引く。

この線は、後頭部の線が頸部におりる前に、後頭部の下の特別のかぼみに接する。

後頭部の線は頸部の後ろの、垂線 k l 間の半ばまで引かれる。

次に垂線 k l 間を 3 点で 4 等分する。その最も後ろの点から垂線を引く。この線は後頭部のつむじに接する。

方形の上の、頭頂部に接する水平線を a、下のどのくぼみに接する水平線を b とする。

次に別の水平線をその中に引く。

水平線 a から 1/16 下に水平線 c を引く。この線は額の前の垂線上の旋毛と後頭部のつむじを通る。

水平線 c から [1/4 の] 1/6 下に水平線 d を引く。この線は顎下を通る。後頭部の下部は、この水平線上の頸筋の上にある。この線はまた…頸筋の下に接する。頸部の線は曲線で引かれる。

頸部が二つの曲線で引かれることに留意することである。上の線は頭部を頸部から、下の線は頸部を胴体部から分ける。

それで頸部の下の線は垂線 c 上で水平線 d に接する。またそれは前と後ろで水平線 b に接する。前とはのどのくぼみである。

水平線 d b 間を 2 点で 3 等分する。下 1/3 に水平線 e を通す。この線 e 上で顎の下面と頸部の上の線が接する。頸筋の下は胴体部の上に接する。

のどのくぼみから 前の腋下まで 1/10。

〃 乳頭まで 1/9。

〃 腰関節の高さまで 1/60。

〃 脇腹まで 1/5。

〃 胸下まで 1/7。

〃 m l k j h g f e d c b a

〃 [意味不明]

脇腹から 臍まで 1/19。

〃 腰まで 1/14。

〃 腰の下端まで 2/15。

〃 腹の下端まで 1/6。

〃 陰部まで 1/11 + 1/10。

〃 陰茎の下端まで 2/9。

〃 臀部の下端まで 1/4。

腰の下端から両大腿部間の隙間まで $2/15$ である。

膝は腰の下端と足裏間の中央にあり、膝上は(膝中央から) $1/30$ 、膝下は $1/36$ のところにある。

2本の水平線 f と j (f と j はともに初出) に接しないように、上下の脛を描く。

次に頭部の下の身体とその諸部分の長さを次のように区切る。

最初に頭部の方形の下を区切る。

のどのくぼみの高さから肩関節の高さまで $1/60$ 。

- 〃 胸の高さまで $1/16$ 。
- 〃 前の腋下まで $1/10$ 。
- 〃 乳頭まで $1/9$ 。
- 〃 胸下まで $1/7$ 。
- 〃 脇腹まで $1/5$ 。

2

男女の像が幾つかの種々の必要事とともに作成され図示されたので、次に幼児の像を描く。次のようにする。

幼児の側面像が描かれたので、次にその正面像を描き、側面像と並べることにする。

前述の像と同様に、そのための特別な垂線を引き、最初の垂線と同じ高さで並べる。

前に引かれた全ての平行な水平線をユーバートラーク (Übertrag) によっていま引かれた垂線に通せば、幼児全体の全ての高さや長さが示される。次に示されるように、その線上に幼児の肢体部の幅が測られる。先ず顔の正面図を方形内に描く。その方形はユーバートラークによって頭部の側面と同じ高さで作られ、諸部分の全ての高さも自ずと区切られる。

あとは顔の諸部分の幅を区切るだけである。顔の正面の方形は長方形で、頭部の側面の方形より細い。その幅は $2/9$ である。次のようにする。

この方形の2本の垂辺の右を a、左を b とする。垂辺 a b 間に2本の平行な垂線 c d を定める。この2垂線は目尻と男性器の両側に接する。

次に腕の正面の幅を測る。

この幼児像がある女性像と較べられれば、その大きさは女性の身長 $1/3$ である。

次に男の幼児の形態の線を全ての肢体部において、いま示された長さ、厚さ、幅で側面図と正面図に描く…

Nr. 6 幼児の比例、頭部の側面・正面・背面図、身体の側面・正面・背面図。(1 ドレスデンのスケッチ帖から、2と3 ロンドン草稿、いずれも1513年、R.2.347~351頁)

1

[図10に以下の記載がある]

頭頂部。頭部の旋毛。眉毛。鼻。口。顎。のどのくぼみ。肩の高さ。腋。乳頭。胸下。脇腹。臍の中心。腰の上端。腰。腹の下端。陰部の上。臀部の下端。両大腿部間の隙間。膝上。膝中央。膝下。ふくらはぎの下端。足の甲。足裏。

2

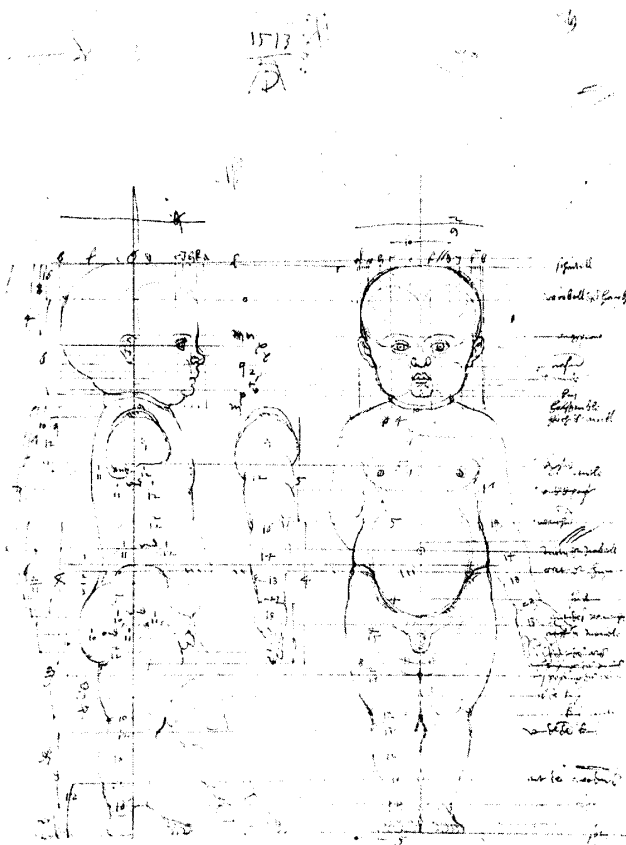


図10 ドレスデンのスケッチ帖 fol.164^b Strauss 47

のどのくぼみ。後ろの腋。

3

男女の比例が測られたので、次のように幼児の比例が測られなければならない。

最初に頭部の側面図を描く。〔身長〕 $1/4$ の高さの正方形を作り、前の垂辺を a 、後ろの垂辺を b とする。上の水平線を l 、下の水平線を m とする。

次に頭部の側面図の全ての部分の奥行きを垂線で区切る。

垂線 $a b$ 間を4線 $c d e f$ で5等分する。垂線 c は目尻に接する。垂線 f は後頭部の線が頸部に移行する前の、後頭部の特別のくぼみに接する。

方形の中央に垂線 g を引く。この線は身体を貫通する。耳は垂線 $e g$ 間に含まれる。垂線 $e f$ 間の中央で頭部は頸部に移行する。

垂線 $a c$ 間を3垂線 $j h k$ で4等分する。線 j は a のすぐ横である。垂線 j は額の旋毛と上唇に接する。垂線 h は鼻翼の後ろと口の隅に接する。垂線 k は顎の下のくぼみに接し、眼球を通る。

垂線 $b f$ 間を3点で4等分する。線 b のそばの最も後ろの点は、後に引かれる線〔水平線 o 〕上で、後頭部のつむじに接する。以上で垂線が引かれた。次に全ての部分の高さと低さを示す水平線を引く。

水平線 l から $1/16$ 下に水平線 o を引く。この線は後頭部のつむじと垂線 j 上で額の旋毛の両方に接する。方形の中央に水平線 n を引く。その線は眉毛を通る。眉毛は中央で〔水平線 n より〕上にあがり、両端で下がる。この水平線は耳上に接する。

水平線 o から $1/6$ 下に水平線 p を引く。この線は顎下に接する。後頭部はその線上で頸部に移行する。

水平線 $n p$ 間を水平線 q で2等分する。この線は鼻下と耳下に接する。

次に水平線 $q p$ 間を4水平線 $r s t v$ で5等分する。最上部には人中が含まれる。第2部分には上唇の厚さが含まれる。第3部分には下唇とその下のくぼみが含まれる。顎は下の2部分に含まれる。水平線 s は口の中央を通る。前述したように、後頭部が頸部に移行するまえに、水平線 s と垂線

f の交点に、特別のくぼみがある。

頸筋の上部は、2本の水平線 $p v$ 間の中央にくる。肩肉は線 x までくる〔 x は初出で説明なし〕。

水平線 $p m$ 間を2点で3等分する。下の点に水平線 z を通す。顎下のたるみはその線に接する。頸部の前は2水平線 $z m$ 間にある。額の露出部は側方で〔耳側で〕垂線 g に接する。額の露出部は水平線 $l o$ 間の中央に収まる。水平線 m 上での頸部の厚さは $1/9$ である。次図にみるように〔図10を参照〕、頭部の形態の線を、以上の直線〔垂線と水平線〕を通して描く。

次に顔の正面をその方形に描く。そのために顔の側面の全ての高さをフェアトラーク (vertrag) によって水平線で転移して、正面図のための方形を最初の方角同様に区切る。

顔の正面図のための方形は、側面図のための方形よりも細くしなければならない。その幅は $2/9$ である。

二つの垂辺を a と b とする。この方形の諸部分の全ての高さをフェアトラークによって水平線で区切れれば、あとは諸部分の幅を垂線で区切るだけでよい。

垂辺 $a b$ 間の中央に $1/10$ の間隔で2垂線 $c d$ を引く。この2線は目尻と頸部の外郭線に接する。

垂線 $c d$ 間を2線 $e f$ で3等分する。2線は目頭と鼻翼と口の隅に接する。

次に垂線 $a b$ 間と $d b$ 間を4垂線 $g h$ と $j k$ で6等分する。

両方の耳は垂線 $a g$ 間と $k b$ 間に含まれる。下の耳朶は垂線 $g h$ 間と $j k$ 間の、線 g と k に近い側の半分に収まる。頭部の外郭線は2垂線 $a b$ に接しない。垂線 $a g$ 間と $k b$ 間を4点で6等分〔テキストでは5等分とあるが、これは明らかに誤記〕して、 $a b$ に近い2点から2垂線 $l m$ を引く。この2線は頭部の外郭部に接する。次図〔図10を参照〕にみるように、〔形態の〕線を方形に描き込む。

頭部の背面図を正面図の外郭線に従って描く。

幼児の頭部を仕上げたので、身体を描く。最初は側面像である。

頭部と頸部は最初の $1/4$ の正方形に含まれる。

のどのくぼみから腰の下端まで〔身長〕 $1/3$ の長さである。

のどのくぼみから脇腹まで $1/5$ である。

脇腹から臀部の下端まで $1/4$ である。

頭頂部から臍まで $1/2$ である。

のどのくぼみから前の腋下まで $1/10$ である。

前の腋から肩の高さまで $1/12$ である。

のどのくぼみから後ろの腋下まで $1/9$ である。

乳頭は腋下の水平線上にある。

のどのくぼみから胸下まで $1/7$ である。

脇腹から腹の下端まで $1/6$ である。

胸の下から $1/4$ 下に幼児の陰部がある。

臍の下から $2/11$ 下に睾丸の下端がある。

臍の線と腰の下端の線の2線間を2点で3等分して、上の線を通して線を引けば、その線は腰を通る。

膝は足裏と腰の下端の中央にある。

足裏から足の甲の高さまで $1/20$ である。

足裏からふくらはぎの下端まで $1/12$ である。

足の甲から膝下まで $1/8$ である。

腹の下端から $1/10$ 下のところに、脚の内側に小さなソーセージのような形状がみられる。

睾丸から $1/13$ のところで膝の形が始まる。

このようにして肢体部分の全ての高さが得られた。次に〔それらの高さを示す〕水平線を引いて、それらの線に部分名を記し、またその線上に肢体部分の全ての厚さを示す数値を記す。

まず足の長さは $1/7$ である。

足の甲における脚の厚さは $1/16$ である。

ふくらはぎ下端の厚さは $1/12$ である。

ふくらはぎ中央の厚さは $1/10$ である。

膝下での厚さは $1/12$ である。

膝中央での厚さは $1/10$ である。

膝上での厚さは $1/8$ である。

臀部の下の厚さは $1/7$ である。

睾丸上の身体の厚さは $1/6$ である。

陰部上の厚さは $1/10+1/11$ である。

腹の下端での厚さは $1/10+1/11$ である。

腰での厚さは $1/5$ である。

腰の始まりでの厚さは $1/10+1/11$ である。

臍上の厚さは $1/11+1/12$ である。

脇腹での厚さは $1/6$ である。

胸下での厚さは $1/11+1/12$ である。

乳頭上の厚さは $2/11$ である。

肩での厚さは $2/15$ である。

この後次図にみるように、幼児の形態の線を描き入れる。

次に腕の側面を測る。

肩下から肘までの長さは $1/5$ である。

肘から指先までは $1/4$ である。

手の長さは $1/9$ で、厚さは $1/18$ である。

手関節の厚さは $1/23$ である。

さらに肘に近い方の腕の厚さは $1/18$ である。

肘下の最も太い部分での腕の厚さは $1/14$ である。

肘での腕の厚さは $1/16$ である。

腋下での腕の厚さは $1/12$ である。

肩での腕の厚さは $1/9$ である。

この後次図にみるように、腕の側面の線を描き入れる。

幼児の側面像を描いたので、フェアトラークによって肢体部分の全ての長さを〔側面像から〕正面像に移す。そうすればその後は幼児の正面像の肢体部分の幅を測るだけでよい。前に描かれた $1/4$ の高さの頭部をその位置にすえる。

肩の最初の高さでの幼児の身体の幅は $1/4$ である。

胸上での最大の幅は $2/7$ である。

腋下での幅は $1/5$ である。

乳頭間の幅は $1/7$ である。

脇腹での幅は $1/5$ である。

腰上の幅は $1/4$ である。

脇腹から腰の下端まで身体の両側に直線を引く。その線で胴体部の形が分かる。

腹の下端での幼児の幅は $4/15$ である。陰部上の幅も同じである。

睾丸の下端での大腿部の幅は $1/15+1/16$ である。

臀部の下端での大腿部の幅は $1/8$ である。

大腿部間の特別の隙間での大腿部の幅は $2/17$ 。

膝上の脚の幅は $1/10$ である。

膝中央の幅は $1/12$ である。

膝下の幅は1/13である。

ふくらはぎ中央の幅は1/12である。

ふくらはぎの下の幅は1/16である。

足の甲の上の脚の幅は1/19である。

足の正面の幅は1/15である。

腋下での腕の正面の幅は1/17である。

肘での腕の幅は1/18である。

その下の最も幅のあるところで1/14である。

さらにその下の幅は1/18である。

手関節での腕の幅は1/20である。

手の幅は1/13である。

この後実際に次図にみるように、身体の形態の線をきちんと描き入れる。

幼児の正面像の外郭線に従って、〔背面像の〕形態の線を描く。ただ背面の両腋間の幅は4/17である。

臀部の割れ目の長さは1/9である。

このようにして幼児の像は描かれた。

挿 図 一 覧

- 図 1 ロンドン草稿 5230,fol.185^a
- 図 2 ロンドン草稿 5230,fol.186^b
- 図 3 ロンドン草稿 5230,fol.187^a
- 図 4 ドレスデンのスケッチ帖 fol.97^a
Strauss 125
- 図 5 ドレスデンのスケッチ帖 fol.165^b
Strauss 22
- 図 6 ロンドン草稿 5228,fol.187^a
- 図 7 ニュルンベルク, ゲルマン民族博物館
fol.7^a
- 図 8 ロンドン草稿 5228,fol.186^a
- 図 9 ロンドン草稿 5228,fol.186^b
- 図10 ドレスデンのスケッチ帖
fol.164^b Strauss 47

挿図説明の「ロンドン草稿」は、大英博物館所蔵のデューラー草稿を指す。また Strauss は、W.L.Strauss: *The Complete 'Dresden Sketchbook'*, New York 1972. の略称である。